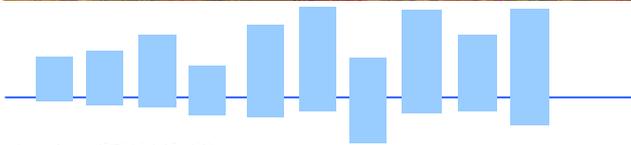


ダルニー通信





タイの奨学生数

2007 年度は 11,340 名

2006 年度は 10,686 名

2007 年度は 11,173 名の中学生（昨年 10,515 名）と 167 名の高校生（同 171 名）合計 11,340 名が奨学金を受け、2007 年 5 月に新学年を迎えることができました。ご支援を有難うございました。

タイのダルニー奨学生（日本での募金分）

学年	中1	中2	中3	合計
奨学生数				11,173
学年	高1	高2	高3	合計
奨学生数	61	48	58	167

タイ：経済発展の影で取り残される東北地方の農村

タイを初めて訪れた方は、新しい空港の巨大さに、空港から外に出て見る車のほとんどが新車、しかも高級車が少なくないことに驚かれるでしょう。林立する高層ビルやショッピングセンター内に山と積まれた商品の膨大な量、ホテルの豪華さにも目を見張ることでしょう。しかし、空港・ホテル・ショッピングセンター・リゾート地の間を行き来している限り、タイの経済発展の光の部分しか見ていないこととなります。高速道路の脇、川や線路に沿って広がるスラムの数はタイ全土で 1600 とも 2000 とも言われ、スラム人口も 10 万人をはるかに超えています。これはバンコクの人口が約 600 万人強、第 2 の都市ナコンラーチャシーマーや第 3 の都市チェンマイが数十万人、この極度の一極集中が大きな経済格差を生み、たくさんの方が収入を求めてバンコクやその周辺部、リゾート地帯に出稼ぎに出るためです。その結果、農村部は過疎化し、ダルニー奨学生を例にとれば、5 人に 1 人が親と一緒に暮らしていません。中流階級は増大しているようですが、経済格差はなかなか縮まらず、学校に行きたくても行けない、または中退する子どもが今も少なくない



いバンコク北部のスラム川沿



学校に通うラオスの子どもたち

というのが現状です。20 年前にスタートとしたダルニー奨学金の必要性は今も変わりありません。

ラオス：ベトナムを追い越すと副知事は豪語するが・・・

2002 年にラオスの最も貧しい県の 1 つ、セーコーン県の副知事を表敬訪問した際、その副知事は「ベトナムに通じる横断道路が完成すれば、輸出港にアクセスしやすくなり、ラオスの経済が活性化する。2020 年にはベトナムを追い越す」と豪語していました。そして、サワンナケート県のその道路沿いに経済特別区ができましたが、期待通りの企業誘致が出来ていないようです。その原因の 1 つとして、教育水準の低さが挙げられます。小学校卒業率は全国平均で約 40%、特にダルニー奨学金対象県の中南部では 10~20%です。学校は掘っ建て小屋のような校舎が多く、同年（2002 年）に訪ねた学校の先生の給料は 4 ヶ月の遅配でした。重債務貧困国のラオスは、教育の重要性はわかっているにもかかわらず十分なお金がなく、校舎の建設費や先生の給料にごくわずかな予算しか回らないのです。また、多くの家庭（農家）で教育費を捻出できないと分かっているにもかかわらず、制服や教科書などの学用品を無料配布できないのです。このような教育環境の貧困が、さらに子ども達を学校から遠ざけます。

2020 年までにベトナムを追い越すほどの急ピッチの経済成長がラオスに必要なのかわかりませんが、少なくともどの家庭にも健康を維持するだけの食べ物があり、すべての子どもが基礎教育を受けることができ、病気や怪我をしたらどの人も必要最低限の治療を受けることができる程度の経済発展は必要です。しかし、それにはまだまだ時間がかかります。2007 年度のラオス奨学金の締め切りは 7 月 20 日です。ぜひ引き続きラオス児童に対する皆様の教育支援を宜しくお願いいたします。

勉強は大好きで、成績はクラスで 1 番

チェーは 7 歳。4 歳の弟と両親の 4 人家族です。両親は農家で、お米は年 1 回の収穫ですが、家族の 4 か月分しかとれません。そこでお父さんが家の建築や木材工場で日雇い仕事を探し、仕事があるときは日給 220 円を稼ぎます。一家に貯金はなく、学校が始まると学用品の購入に悩まされます。チェーは朝、水汲み、朝食の準備をしてから学校に行きます。学校が休みの日には食料を探すために、お母さんと森に入ります。どちらかというと寡黙なチェーは勉強が大好きで、1 度も学校を休んだことがありません。成績はクラスで 1 番。得意科目は国語。夕食の後は必ず教科書を読みます。お母さんはチェーに医者になってもらいたいです。



チェー（右）お母さんと弟

ラオスの奨学生レポート
奨学金を申し込んだ小学
2年生の苦しい生活と希望
 不発弾でお父さんが死亡、年
 間の収穫量は家族の 3 か月
 分、日雇いの日給 180 円、
 森での食料探し・・・

シー（写真右）には弟が 2 人います。それで学校の昼休みには、500 メートル離れた学校から家に帰り、お母さんが昼食を作る間、2 歳の弟の面倒を見ます。



朝は水汲み、朝食の準備をしてから学校に出かけます。学校が休みのときは草で屋根を葺く手伝いもします。両親はお米を作っていますが、年 1 回の収穫で家族が食べる 3 か月分しかとれません。それで、お父さんはときどき日雇い労働をしますが、日給は 180 円程度。「この子は勉強に熱心で、成績もよいのですが、家にお金が無いので、このまま学校を続けられるかどうか、心配です」とお母さん。奨学金がなければ、シーは長男ゆえに、親が学校を止めさせる可能性があります。

貧困家庭の長男ゆえに、学校をやめなければならぬかも・・・

ラオス奨学金の締め切りは 7 月 20 日です。
 奨学生の証書・写真は 12 月に届きます。

お父さんが不発弾で死亡、長男が学校をやめて出稼ぎ

一昨年、生活のためにくず鉄を集めていた父さんが不発弾の被害に遭って亡くなり、6 人のきょうだいのうち、15 歳の長男が中学校をやめて出稼ぎに出ました。3 ヶ月に 1 回、3,000 円ぐらいお金を送ってきます。残り 5 人のきょうだいのうち 3 人が学校に通い、その他 4 歳と 2 歳の子どもがいます。3 人の子どもの学校に通うことに、お母さんはかなりの負担を感じています。

食べるものがなくなると、お母さんとお兄さんは森に入り、野草や木の実、竹の子、などを取って来ます。その間、コイはお米を蒸したり、水汲みに行ったり、弟や妹の世話をしたりしながら、お母さんの帰りを待ちます。コイの夢は先生になることです。



コイとお母さん（上）。家の前に立つコイ（下）



**カンボジアのダルニー奨学金を運営する現地
NGO「SCADP」の代表イム・ソカリーさんが来日**

**「首都プノンペンのストリートチルドレン
の99%は地方出身。でも奨学金をもらっ
た子どもは、都会に出てストリートチルド
レンになることはほとんどありません」**

2007年度からカンボジア奨学金が正規事業に



ソカリーさん(右)とパナリットさん
(左)。民際センター事務局で

今年4月、カンボジアのダルニー奨学金を運営する現地 NGO「SCADP (=Street Children Assistance and Development Programme)」の代表、イム・ソカリーさんと副代表のパナリットさんが来日し、12日に民際センターの事務局で報告会を開きました。ソカリーさんはポル・ポト時代を生き抜き、その後ゼロからたった一人で子ども達のための活動を続け、ついに SCADP を立ち上げました。この記事では、彼女が報告会で話した内容に民際センター事務局が事前に入手した情報を加えて、ソカリーさんの個人史とカンボジアの子どもの状況、及び SCADP の活動について紹介します。なお、試験的に行っていたカンボジアのダルニー奨学金は2007年度から正規事業となり、3年継続のAおよびBタイプの支援もできることになりました。

ポル・ポト時代 (1975年~1979年): 18歳だったソカリーさんはポルポト軍に銃で脅されながら、住んでいたプノンペンから家族とともに北西部のプルサット県に避難させられました。その後、ソカリーさんと妹は若者グループに入れられ、以後3年8ヶ月にわたって主に農作業に従事させられたため、家族とはバラバラになりました。この間、絶えず死と隣り合わせでした。与えられた計画が完了しないと罰として食べ物が与えられなかったり、監禁・拷問されたり、殺されたりする人もいました。わずかな食事で過酷な労働。朝から夜遅くまでダム用の用水路を掘る作業をしていたときは、あまりに疲れて用水路の水の中で眠ってしまったそうです。空腹のために食物を盗む現場を見つけてレイプされ、手首を切り落とされた女性もいました。この間の死者数は様々に推定されていますが、一説では150万人とも200万人とも言われています。ポル・ポト時代が終わった後、ソカリーさんはお父さんや親戚の成人男性たちが殺されていたことを知りました。**ポルポト後の時代 (1979年~1989年):** ソカリーさんはプルサット県で6人の子ども(3人の甥と1人の姪、血縁関係のない2人の子)の面倒を見ながら、生活のために必死に農業をしていました。

SCADP 設立前までのプノンペン時代 (1990年~1998年): 1990年、ソカリーさんは国際機関に勤めようとプノンペンに出てきましたが、英語もコンピューターもできないため、希望する仕事には就けませんでした。また、プノンペンは出生地であり生活の場であったにもかかわらずもはや家はなく、義兄の家に居候をしながら、昼はホテルの清掃やバイク屋などで働き、夜にはろうそくの灯の下で書いた童話を本屋に売って生活をしていました。一方、通りでは靴磨きやゴミ拾いなどをしながら生活している子どもや、怪我や病気のまま寝ている子どもが大勢いました。ソカリーさんは時間を見つけては、こうした子ども達の話聞いて歩きました。1993年、ボランティア団体に入り、最初は無給で、その後はわずかな給料で彼らに読み書きを教え始めました。さらに、自分で寺院内に寺子屋のようなものをつくり、彼らに基礎教育を提供しました。「私は辛い子ども時代をすごしたので、通りで生活する子ども達の2番目の母親になることで、彼らに良い子ども時代をすごしてもらいたいと思ったのです」とこれらの活動の動機を語ります。

SCADP 設立後 (1998年~): 1998年に NGO「SCADP」を設立すると、政府から「無法地帯」と呼ばれている地域の子どものためのノン・フォーマル(非正規)教育機会の提供、職業訓練や収入向上などの自立支援事業を開始しました。生徒の中には元ギャングもいましたが、彼らを励まし勇気付けた結果、今ではノン・フォーマル教育の先生になっている例もあるそうです。SCADP は外国からの財政的支援を受け、これまでに10,971人の子どもに教育の機会を提供してきました。SCADP は2003年から民際センターと提携し、2つの県でダルニー奨学金の提供を始めました。今でもまだ貧しさゆえに学校をやめ、都会に来てストリートチルドレンになったり、人身売買や児童労働として国境などに売られたりする子どもが絶えないそうです。「だから、これからも日本の皆さんからの支援が是非必要なのです」とソカリーさんは静かな声で、しかし確固とした口調で訴えます。

小6のサオ・ニム

極貧で親元を離れ、祖父母と生活。成績はクラスで2番

サオ・ニムは13歳でプノウ小学校の6年生。3人きょうだいの真ん中ですが、実家を離れて祖父母の家で暮らしています。というのも、兵士だったお父さんが地雷を踏んで死んでしまい、6人家族の実家は極貧のためニムを養うことができないからです。祖父の家での水汲み、炊事、掃除はニムの仕事です。また、お金を得るために、隣近所での仕事を探し、さまざまな手伝いをします。しかし、1日働いても30円ぐらいにしかなりません。学校が長期の休みになると、あまり健康ではないお母さんを手伝って農業や炭焼きをしますが、1日40円ぐらいにしかなりず、一家の月収はせいぜい4000円程度です。

ニムは勉強が大好きで、クラスで2番の成績です。得意科目は国語と算数。課外授業では英語も習っています。先生からの信頼も厚く、先生の仕事の補助をしたり、先生が休みのときは、代わりにニムが教えることもあります。将来は先生になりたいと思っています。



ニム(左)とリンハン(下)



カンボジアのダルニー奨学生の現地レポート
 極貧の中、生活に悪戦苦闘しながら、奨学金で学校に通う子どもたち

小6のホーユン・リンハン

両親が死亡、病気の祖父をささえ、きょうだいで助け合いながら生活

リンハンは3人兄弟の末っ子です。

両親は2人とも病気にかかり、薬がないため亡くなってしまいました。親戚の土地に小さな小屋を建ててもらい、病気の祖父と暮らしています。生活を維持するために、休日や放課後、時々学校を休んで、お兄さんたちと牛を世話したり、森で木を切って運んだり、お米から団子を作る手伝いをしたりします。家族の1日の収入は150円ですが、自給する米がないので、この収入では足りず、仕事を求めていつも様々な場所を移動しなければなりません。

リンハンは片道5キロのプーミネントの学校に歩いて通っています。得意科目は国語と社会。家族がどうやって食べていくかについていつも考えているリンハン
 の将来の希望は、車やバイクの整備工になることです。



パブ校長

プーミネント小学校のパブ校長先生

奨学金をもらうことで、中退する子が減った！

パブ校長は、せっかく学校に来て生活が厳しいため、中退してしまう生徒が多いので、どうやってやめないで学校に続けて通ってもらうかに日夜頭を悩ましていました。「先生が口をすっぱくして学校に通い続けなさいと親に説得しても、口だけでは難しいのです。ところが奨学金をもらって、学校に通い続けるだけでなく、成績まで上がってきます」と奨学金の効果に驚いています。「もし奨学金がなければ、今、学校にきている子もやめていったかもしれません。奨学金を提供してくれた日本人の方に感謝しています。」

カンボジア奨学金の締め切りは、7月20日を予定しています。奨学生の証書・写真は12月にお手元に届きます。資料請求は事務局まで。

学校ドナー紹介

まだ見ぬ友人へ

岡山県立岡山東商業高等学校
本校では、4 年前から「課題研究」アントレプレナーシップ講座という授業で、「新の学力から真の実力を」をキーワードに模擬株式会社を設立し、会社の経営（企業）理念にあったオリジナル商品の開発に取



り組んでいる。

その実態は、講座受講生6名（写真右上）が、社長、製造部長・営業部長・人事部長・経理部長・一般社員に分かれ、わずかな資本金でオリジナル商品をデザインし、商品化させ、販売を目的に正式な会社登記はしていないが、会社設立に必要な書類を作成し、4月末に模擬株式会社を設立しスタートしている。

2006年度は、地産地消・岡山らしさ・社会貢献をしてほしい、というミッションのもと、インターネットや会社訪問で支援業者を探し、共同開発の契約を結び、市場調査や近隣の中国デザイン専門学校生から意見を聞くなどして、既存のおかきを参考にオリジナル商品＝「おちゃづde美人」（米菓子）を開発（写真左上）、9ヶ月間の販売をした（写真右下）。その結果、得た利益については、これまで支援していただいた方々へ還元しようと、インターネットで検索していたところ、日本国際交流センターのサイトを発見。「皆さんの年1万円で1人の子どもの人生を変えることができます」に感動し、株主総会へ提案したところ、満場一致で民際センターに奨学金として寄付をお贈りすることに決めた。

民際センターは今年、おかげさまで20周年

さまざまな事業を行います

日本国際交流センターは創立 20 周年を機に、2007 年 4 月 1 日～から 2008 年 3 月 31 日を創立 20 周年キャンペーン期間と定め、以下のとおりの取り組みを行います。このキャンペーンは子どもたちのために、さらに教育支援の輪を広げ、強化したいとの私たちの強い希望から計画しました。是非皆さんの積極的なご支援、ご参加をお願いいたします。

広報・募金活動キャンペーン

キャンペーン期間中、これまで以上に積極的に広報、募金活動を行います。是非この機会に身近な方へダルニーをご紹介ください。

ダルニー奨学金紹介の新しいビデオ作成

現在、新しい広報ビデオを作製中です。6月には完成予定ですのご活用ください。

20周年記念イベント

皆さんとともに歩んだ 20 年を振り返り、明日への一歩を確認し合う集いを 11 月に東京で行おうと企画中です。日時、会場、プログラムはダルニー通信次号でご案内いたします。皆さん、奮ってのご参加を。

タイ・ラオス・日本の中学生の交流

タイ東北地方で 8 月にタイ・ラオス・日本の中学生の文化交流を行います。国境を越えた中学生の相互理解が明るい未来を築く礎となることを期待しています。

事業成果の確認

タイ事務局でもラオス事務局でも過去の事業を振り返り、事業の評価作業を開始しています。限られた予算の中での限定的な自己評価ですが、さらに良い教育支援が行えるよう、きっちりとした評価を行います。

新企画の研究、立案

昨今、注目を浴びる団塊の世代や若い人たちが参加できるように、当センターの将来像を盛り込みながら新企画を作成中です。すでに「団塊の会合」と称して有志の方が集り、意見交換会を開いています。

組織強化、法人化準備

海外事務局との連携、財政基盤強化などを通し、団体の透明性、信用度を高めるための組織強化を重点項目として取り組みます。また 2008 年 12 月にスタートする新しい公益法人制度を視野に入れて、法人化への積極的な研究と準備も進めていきます。

協力企業紹介

ハガキ 1 枚から出来るボランティア
ダルニー奨学金で、タイ・ラオスの子どもを支援

キリンビール株式会社 社会環境室

キリンビールでは、2001 年から継続的に書き損じハガキの収集活動を行い、2006 年までにタイとラオスの子どもたち 31 名の基礎教育を支援してきました。毎年 1 月、年賀状の時期が終る頃にグループ社員に呼びかけを行い、これまでに収集したハガキは計 21,250 枚を数えます。

「ハガキ 1 枚から出来るボランティア」というわかりやすい呼びかけと、支援している子どもたちを写真つきの報告書で社内へ紹介しているため、活動に対する社員の理解と共感を得やすく、取り組みやすいボランティア活動として全国の社員から協力を得ています。

同社が支援する奨学生の写真と報告書を持つ担当者エコジロー(=キリンの環境活動シンボルキャラクター)



また、2003 年よりスタートした社員ボランティア支援プログラム「キリンコラボ倶楽部」では、社員がボランティアに近隣地域で行った環境や福祉等の活動で獲得したポイントを 10 ポイント = 100 円の換算でマッチング寄付を行っています。2006 年度分のポイントはダルニー奨学金や社会貢献活動を行っている NPO などに寄付することを決定しました。「キリンコラボ倶楽部」は、社員とその家族がボランティア活動に関心を持ち、社会とより良い関わりを持ちながら継続して活動していけるよう会社として応援していく制度です。活動内容を倶楽部事務局にレポートすると、マイレージ形式でポイントがどんどん貯まる仕組みになっており、2006 年度にはのべ 3,600 名もの社員が参加しています。

その他にも、全国 12 カ所の工場の水源地で地域の皆さまと一緒に、水の恵みを守る活動「キリン水源の森づくり」を行い、1999 年から延べ約 3 千人の手で、約 1 万 5 千本の苗木を植樹してきました。また、創立 100 周年を迎える 2007 年度は、キリンの環境活動シンボルキャラクター「エコジロー」にちなんで、「チーム・エコジロー活動」と称する水資源保全活動を全国で展開していきます。ホームページでは、1 クリックにつき 1 円が全国の緑化活動を行う「緑の募金」に寄付される「エコジロー・クリック募金」なども行っています。

キリングループは、「おいしさを笑顔に」をグループスローガンに掲げ、いつもお客様の近くで様々な「絆」を育み、これからも地域社会に貢献していきます。

ワンコイン募金と書き損じはがき、未使用テレカ、マッチングギフトで奨学金支援

デュプロ株式会社 社会貢献倶楽部 Shine Club

「世界の人々が平和の中で輝く(シャイン)為に、私たちデュプロ社員(シャイン)も何か力になりたい」、そんな願いを込めて名付けた社会貢献倶楽部です。

輝く笑顔の Shine Club のロゴマーク



弊社が社会貢献活動を始めたのは、一社員が見た NHK のあるテレビ番組がきっかけでした。それは…。タイの貧しい農村の少女が日本人の支援で学校に通い、仕事を心得働きながら、大学の農業開発学科に進んだ様子を紹介していました。彼女は、「将来農業の安定に貢献し、後輩にも教育のチャンスを与えられる人になりたい」と、支援を続けてくれた女性に話していました。

教育が学ぶ本人だけではなく、社会に還元されていく事を伝えていました。彼女の為にその日本人が行っていた支援金額は年間 1 万円。何気なく使ってしまう

1 万円に、こんな大きな価値があったとは...それが日本民際交流センターの、ダルニー奨学金との出会いでした。



デュプロ青森営業所所員とダルニー奨学生の証書、それを支える募金箱の数々です

これを機に社会貢献クラブを発足、募金活動が始まりました。会社側も

マッチングギフトという形で協力。少しずつ支援も増やす事ができました。そして、新潟中越地震、インド洋大津波の被害に遭われた方々への支援、発展途上国への古着支援等々...社会貢献活動に対する社員の関心も高まり、少しずつ活動の場を広げています。ダルニー奨学金制度では、子どもたちの写真や報告書が送られて来ますので、支援する楽しみと励みになっています。今後も、支援を続けられるよう、活動していきたいと思っています。

ラオスの教育レベル向上に向けた人材育成 (TTM) 事業へのご支援のお願い

第 1 期生が修士号を取得し、晴れて卒業

コーンケン大学大学院で修士取得を目指す第 4 期生の支援者を募集

ラオスの教育事情は様々な課題を抱えています。貧困や教育環境の問題、子どもの人口増加の速いスピードに対応できていない先生の数の問題などに加え、教えている教師自身の質の問題が深刻な課題として指摘されます。教え方や教科についての十分な知識がなくても先生になってしまうこともあり、教師自身の基礎学力が乏しく、実施されている教師訓練も期待される効果が上がっていないのが現状です。

では、ラオスの教師の質を高め、教育レベルを向上させていくためには、どうしたらよいでしょうか？ 民際グループは、効果的で標準化された教授方法の確立こそ最優先課題であり、そのためには、現状の教師能力を十分考慮した適切な教師用指導要領の作成が不可欠であると考え、指導要領の作成に携わる優秀な人材を育成する TTM (Teacher Training team at Master degree level = 修士課程における、ラオスの教育レベル向上に向けた人材育成事業) を実施しています。

本事業のプロセスは、ラオス全土での公募により現役の高校教師から有能な人材を選考し、タイ国立コーンケン大学の教育学部ないしは理学部修士課程に留学させ、卒業後はラオスの教育機関

で教師用指導要領の作成に携わらせます。2004 年度入学の第 1 期生 4 名の内、理学部生 2 名は昨年 11 月に、教育学部数学専攻の 2 名は本年 5 月に晴れて修士号を取得して卒業しました。近い将来、同国の教育レベル向上を中枢となって担う人材として活躍することが期待されています。

2006 年度は 2 期生 1 名、2007 年度には 3 期生 2 名が入学し、本事業は優秀な人材の蓄積と活用に向け、軌道に乗ってきました。そして、ここに新たに第 4 期生の奨学金のためのご支援をお願いする次第です。

2008 年度コーンケン大学大学院修士課程に入学する第 4 期生へのご支援のお願い

奨学金 (学費及び生活費等) の金額は年間 (1 回) 75 万円で、修士課程入学から修了までの 3 年間で継続してご支援いただきます (総額 225 万円)。詳しい資料のご請求は事務局 (担当: 横山、本田) まで。
2008 年度資料請求の締め切りは 2007 年 8 月 31 日 (金) です。



昨年卒業の 1 期生、ダヴィーさん (中央の花束を抱えた男性)。コーンケン大学大学院の卒業式にて

昨年卒業した 1 期生、ボンマニーさんからのメッセージ

「貴重な奨学金によって留学できた私は常により良い成績を維持して、修士号を取得する意欲を持ち続けることができました。帰国後に、この成果をラオスのみんなに伝えることが出来るのが楽しみです。私を信用してくださり、目的達成を助けてくださった支援者の方に深く感謝しております。そのご親切に報いるためには、一生懸命働いてラオスの教育の質を向上させるために最善を尽くすしかないと考えています」

平成 19 年度「NGO 相談員」を 外務省より受託

ボランティアへの参加方法、総合学習の進め方など国際交流・協力に関することは何でもご相談ください。イベントでの相談コーナーや講演会の講師など「出張サービス」も実施します (無料)。

相談員: 本田多衛子、富田直樹
電話: 03-5292-3260 FAX: 03-5292-3510
E-mail: ngosoudan@minsai.org

10 月研修旅行のごあんない ラオス・サーラワン県への旅 7 泊 8 日

同県の奨学生を支援中の方は奨学生に面会できます

10 月はラオス南部のサーラワン県を訪問します。同県は東をベトナム、西をタイと接し、14 の部族が住むと言われていいます。今回は、タイ東北地方からラオスに出国する予定です。研修旅行では、子ども達や村人との交流、一般家庭への民泊など、他の観光旅行にはない感動を味わっていただきます。皆様のご参加をお待ちしております。

実施要領(予定)

日程:10 月 20 日(土)~27 日(土)

訪問地:ラオス・サーラワン県及びタイ・バンコク

参加費:一人 180,000 円(成田からの往復航空券、団体での全交通費・宿泊費・食費、通訳費、保険料を含む。但し、航空券に付帯する空港使用税、航空保安料、燃油特別付加運賃は含みません。)

他に、バンコク集合のコースもあります。

資料の請求方法(8 月 31 日締切)

郵便:ご自分の宛先を明記し、80 円切手を貼付した返信用封筒を同封の上、事務局までご請求ください。

電子メール:info@minsai.org まで、メールタイトルに「ラオス研修旅行」と書いてご請求ください。資料は電子メールで送信します。

写真でたどる研修旅行

昨年はセーコーン県を訪問しました。一部分しか紹介できませんが、旅行の様子を覗いて見ましょう!

【2006 年 10 月ラオス研修旅行】

セーコーン県コップンタイ村訪問



ラオス入国
タイから陸路で国境を越えました。日本では体験できないことです。国境の町は人や物の往来が活発でした。



UXO LAO
不発弾の処理訓練や住民への広報を行っている施設。処理済のクラスター爆弾が無造作に並んでいました。



学校に到着
暑い中、先生や生徒が列を作ってくれました。こんなに温かい歓迎を受けたのは初めてでした。



奨学金贈呈式
子ども達は奨学金で購入した学用品を心から喜んでくれたようです。中には制服やノート、筆記具が入っています。(左はドナー)



農業体験
昔懐かしい手刈りで、村人の邪魔にならないように稲刈りの手伝いをしました。整然と稲が並ぶ日本の田んぼとは様子が違います。



授業参観
隙間だらけの衝立で仕切られた教室。生徒には教科書もありません。劣悪な環境でも学ぼうとする子ども達に感動しました。



紙芝居披露
お土産の一休さんの紙芝居をラオス語でスタッフが披露しました。初めての体験に子ども達は興奮気味。トンチは万国共通?



観光
村を出発後、観光しながら空港に向かい、バンコクに戻りました。(写真はタイ・ウボンラーチャターニーにある荘厳な大仏塔)

コンパクトカメラを、当センター海外事務所
用に寄贈してください！

当センターのラオスとカンボジアの事務局では、ドナー（奨学金提供者）に毎年送付する奨学生の写真を撮影するためのコンパクトカメラ（デジタル式とフィルム式の両方）がかなり不足しています。



奨学生写真の参考例

そこで、ぜひ皆さんからのカメラ寄贈をお待ちしています。特にラオス事務局では、今年から奨学金を提供する地域を拡大したため（支援対象の4県内に今年から支援が追加された新たな20の郡）少なくとも20個以上の

カメラが必要です。

200以上の小学校で約7,000人も奨学生の写真を毎年撮影するため、各郡のダルニー奨学金選考委員会（県郡の教育委員会と現地教師で構成）にカメラを貸し出し、委員会が奨学生の写真撮影を担当してくれます。

また、コンパクトカメラは、奨学金事業に関する調査、および奨学金以外のプロジェクトの運営・調査・報告等にも使われます。

【希望カメラの条件】

- ・ デジタル/フィルムの両カメラ（完動品）
- ・ デジタルカメラの場合、バッテリー、充電器が付属しているもの
- ・ フィルムやメモリーカードもあれば一緒に送ってください



【送付先】

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518 司ビル301
日本民際交流センター カメラ寄贈担当宛
お手数ですが、送り状に「カメラ在中」とご記入ください。

【問い合わせ】

日本民際交流センター カメラ寄贈担当宛て
info@minsai.org（メールタイトルに「カメラ寄贈」と書いてください） TEL: 03-5292-3260

チャリティ・タイ語（第4回）講座終了

9口分の奨学金と1人の受講生が新規ドナーに

受講者の約半分がタイ語を継続

「スニサーさんの教え方と人柄が素晴らしい」



スニサーさん（中央）が校長を務めるタイ語学校で行われたチャリティ・タイ語クラスの様子

今年1月と2月、毎週月曜日の18:30～19:45の75分、「チャリティ・タイ語講座」（計5回）がタイランゲージアカデミー（東京都）で開催されました。講師は講師歴10年のベテラン、スニサー・ウィッターパンヤーンさん。同校の校長で講師も務め、今まで教えた生徒さんの数は500人以上になります。大学や企業などでタイ語を教える一方、通訳・翻訳も手がけています。

授業料は1人11,000円（資料コピー代&施設利用費含む。別途テキスト必要）で9人が参加し、4名が講座終了後、同校でタイ語クラスを継続中です。4名全員がスニサーさんの教え方を高く評価しています。「質問にもわかりやすく的確に答えてくれるので、いつも『なるほど!』と思います」「タイ語を生きた意思疎通の言葉として使えることを目的とした授業なので気に入っています」「笑いの絶えないアットホームな雰囲気を作ってくれつつきめ細かく指導してくれる。同意語のニュアンスの違いなども丁寧に教えてくれる」「何よりもスニサー先生のお人柄にホレました」などなど。

この内1名はタイ奨学金支援者にもなってください、その理由を次のように語りました。「私の両親は戦時中の生まれで、行きたくても学校へ行けなかったという話をよく聞かされていまして、私のタイ人の友人も子どものうちからずっと働きながら苦労して大学を卒業したと聞いていたので、1万円で1人の子が1年間もちゃんと学校に通えるなら是非と思い、支援をさせて頂きました」。

お知らせ:

人数がある程度集まれば、チャリティ・タイ語をスニサーさんのタイ語学校で再開します。平日 12:00～17:00の間、あるいは、日曜に開催する予定ですので、希望者は日本民際交流センターまで、TEL:03-5292-3260

次回のチャリティ・タイ語クラス開催が待ちきれない方は、通常クラス扱いで、タイランゲージアカデミー（新宿御苑駅徒歩1分）まで TEL:03-3350-1888

既存ドナー連絡会の活動

ダルニーほほえみの会：世話人の渡邊さんは「ほほえみの会通信」を

年に 3~4 回発行し、会員や広報活動、募金箱設置店、インクカートリッジ回収の協力者などに送っています。その第 17 号

で、募金箱からの奨学生・パチャラさん（中 3 = 写真左から二人目）のことを載せましたが、それを読んだ方に、こ



の子は高校進学希望だが、会では支援は難しいことをお話しすると、彼女の高校進学（3 年分）の奨学金 9 万円（新規中学生を含む）を提供して下さったそうです。発行部数 20 部程度とのことですが、地道な活動が実を結ばれているようです。（世話人 渡邊幸男）

幸分会：幸せを分かち合おうと言う事で、連絡会「幸分会」を立ち上げて半年あまり、去る 2 月 25 日に親睦をかねての 2 回目の集りを持ちました。当日は 9 人の出席で民際の活動と NHK が放映した元奨学生の日本訪問の広報ビデオを見た後、これからの会としての動きを話し合いました。まだ産声をあげたばかり

で、具体的な案はこれと言って出なかったのですが、学びたい子どもが 1 人でも多く学べるように取り組んでいけたらいいねと言う事と、秋



頃にまた集る事を決めて散会しました。まずは近隣のドナー同志顔を合わせる事で、お互い啓発し合って行けたらいいなと思っています。（世話人 松田和美）

一滴の会（同会はドナー連絡会ではありませんが、ドナー有志の集まりです）：3 月 21 日、川崎教育文化会館でチャリティダンスを開催しました。世話人の亀高さんが加入している社交ダンスサークル「コホネス」のネットワークを生かし、視覚しょうがいを持つ方が加入するサークルや車椅子に載っている方のサークルなど、幾つかのダンスサークルが集り、年に数回開催します。今回の入場者数は約 60 名。入場料 500 円

連絡会ニュース

のほか、当日の募金やサークルからの寄付などにより、今回も 15 万円が集り、しょうがい児童奨学

金 2 人分（3 年間）とタイ奨学金 1 人分（3 年間）に充てました。今回は入り口に同チャリティダンスの寄付で学校に通う生徒からの手紙と写真をホワイトボードに貼って紹介もしました。（世話人 亀高住枝）



健全者の方も弱視の方も一緒にダンスを楽しんでいました

**7 月 14（土）、15 日（土）第 7 回ドナー & 連絡会の集い
浜名湖でダルニーの 20 周年を先取りしちゃおう**

ダルニードナー連絡会主催の第 7 回全国会議が今年は浜名湖湖畔で開催されます。通称「浜名湖会議」。今年は民際センターの 20 周年ですが、この集いで、これまでの活動の思い出を振り返りつつ、将来にもちょっぴり思いをはせる、そんな集いにしたいと主催者の遠ダ連（世話人は畑寛和さん）は張り切っています。日程は以下のとおりです。お申し込みは事務局まで。奮ってご参加下さい。

日時：2007 年 7 月 14 日、15 日：14 日 13 時スタート
場所：国民宿舎 浜名湖館山寺荘コンベンションルーム

浜松駅前から無料シャトルバス・ロープウェイを予定しています（浜松駅に 11 時にお集まり下さい）。

費用：1 泊 2 食で 13,500 円（予定）

主催：遠州ダルニー連絡会

夕食後の懇親会用に食べ物・飲み物をご持参下さい。

15 日午前で終了ですが、ご希望があれば、午後から温泉、ロープウェイ、遊園地が無料です。



昨年の報告会の様子